

高村光太郎の書

及川 厚

Atsushi OIKAWA

《第二章》 高村光太郎と彫刻 — 彫刻の延長に存在するもの —

一

「書」という芸術を構成する要素で、「文字」は欠かすことが出来ないものだ。その「文字」の特性である伝達性、つまりその「文字」を読む相手に伝わるように正確に書くこと。このことが、私が師匠に教わったことの一つであった。第一章で見えてきた光太郎の家系が、いい加減な言葉や文字をことさら嫌っていたのも納得のいくところである。今回の章では、「十和田湖の裸婦像」を中心に光太郎の書に迫っていきたいと思う。

昭和二十七年六月、光太郎は青森県の委嘱に拠る十和田国立公園功労者顕彰記念碑の彫刻制作を決意し、同年十月、その制作のために帰京。東京中野区桃園町のアトリエで自炊生活に入る。この彫像が「十和田湖の裸婦像」^{注1}である。右手を胸の高さまで軽く出し、左足を踏み出している。同形の裸婦像が二体向かい合っているものである。

この「十和田湖の裸婦像」について様々な意見が出されている。彼の生涯における彫刻制作は寡作に終わったため、この「十和田湖の裸婦像」も、彼の彫刻を代表するものとならざるを得ない。また、この作品が七年の山居生活の後に制作されたということは、彼の彫刻の技術が、長いブランクによってどういう結果となったかは関心の集まる場所である。さらに彼自身七十歳の高齢、肋間神経痛の症状も強く、体力的にも衰えは隠すことが出来ない。それらのような条件の中で、光太郎は「十和田湖の裸婦像」を制作していくことになるのである。そして、そのおよそ一年後に完成し、湖畔休屋御前ヶ浜に除幕される。以後、光太郎の絶作となった「倉田雲平胸像」^{注2}が未完成とされていることから、光太郎の完成された最後の作品として注目されるのであるが、その批評はあまり芳しいものではない。はっきり言えば「裸婦」(大正5年)^{注3}、「手」(大正7年)^{注4}、「黒田清輝胸像」(昭和7年)^{注5}、「光雲胸像」(明治44年)^{注6}と光太郎を代表するといわれるこれらの作品と同等な評価を得るどころか、光太

郎の残した作品の中で酷評が集中する塑像作品となってしまうたのである。やはり、制作時における光太郎自身の環境、殊に、彼が昭和十九年の「河口慧海像」^{注7}、「プラタナスの葉」^{注8}を最後に「十和田湖の裸婦像」まで彫刻作品を一つも制作してこなかった技術としてのブランクが問われているのだろう。ここで「十和田湖の裸婦像」の評価が実際どのようなものであつたか幾つかあげていきたい。

本郷新氏^{注9}。

私は先生の大作裸婦を見て、彫刻というもの、こわさを知った。いや、彫刻生活というもの、恐ろしさを知った。私は先生のこの裸婦についてこれ以上語ることは出来ない。

高田博厚氏^{注10}

彼にとつては七尺の銅像を作ることが問題ではなくて、彫刻芸術の究局の課題である「裸の人間」の構成姿態が問題であつた。精魂つきて彼はこれを未完の状態で手を描いてしまったが、しかしこれは今日の日本の彫刻に指針を与えている。

石井鶴三氏^{注11}

光太郎の最後の作ともいふべき十和田の女人像は彫刻作であつて、内に詩情の掬すべきものがこめられていると思う。だからこの作に光太郎の全身全霊が感ぜられるという所以である。たゞ惜しまれるのは、光太郎は晩年健康の衰えが見えたことである。この絶作にも健康の衰えから来る弱さが払拭出来ないのは、見ていて心を痛ましめられる。

原田実氏^{注12}

「裸婦像」も、近代彫刻の視覚からの切り込みにはほとんど手ごたえの返らない性格のものであつて、見る者はその自然との融合のめてたさを感じるか否かしかない。いつてみればこの像は、観想の作物といった趣をもつて高村光太郎晩年の内面を映しているのである。

この他にも「十和田湖の裸婦像」について意見や評価が様々な形となつて出されている^{注13}。のであるが、彫刻の何が恐ろしいのか、今日の日本の彫刻に指針を与えているのはどういった部分であるのか、健康の衰えから来る弱さとは何なのか、光太郎の晩年の内面をどうして映しているといえるのか。それらの何一つも具体的に語られていないのである。まして、具体的な造型の解説、彫刻としての技術のことなどほとんど触れられていない。ここにはあげなかつた他の「十和田湖の裸婦像」を語るものほとんどがこういったものでしかない。

私は彫刻についての知識はない。その素人の私が「十和田湖の裸婦像」を見てもその出来の善し悪しは分からないが、はっきり言つてこの裸婦像には美を感じることができない。「手」や「光雲胸像」の方が数段良いように思われる。このようなことは批評家でなくても言えることである。だがこのような評価は、いったい彫刻家高村光太郎をどこに運んでいこうとするのか。

その生涯において幾多の彫刻についての論文や批評を書き、寡作であるとはいえ、七十点余りの彫刻を作り上げた光太郎の晩年の評

価が、今まで見てきたようであるとするならば、萩原守衛と並んで、日本近代彫刻に光太郎がもたらしたものをもう一度考え直さなければならぬことになる。そこで私はここに「十和田湖の裸婦像」についての一つの論文を上げたいと思う。

十和田湖記念像は高村光太郎が残した唯一のモニュマンである。そしてこの造型に対する一般の評価はおおむね否定的なものだ。しかしその根拠は論理的に明快にされているものではない。^{注14}

と述べている。また続いて

具体的形の解析なくして厳格な意味での造型の批評はない。^{注15}

とも述べている。『十和田湖記念像の造型』（昭56・12）の著者岡村康彦氏の言であるが、岡村氏のいう通り、我々はいずれにも簡単に物事に接していかないだろうか。彫刻など全然勉強したことのない私が感じるようなことを複雑な言い回しや美辞麗句を振りかざしても、根本の部分で変わらなければ張りぼてに過ぎない。また真に彫刻が分かっており、それでいての評論であるとするならば、素人の私にも理解出来るような具体的な解析でなければ、一体誰のための何のための造型批評かということになる。問題を元に戻すことにして岡村氏の意見をもっと見ていきたいと思う。

この作では、粘土練りから心棒作り、荒づけ、更にはその上にしゅる縄をまきつけるまで、多くの工程の基礎を若い助手の手にゆだねている。…（中略）…

光太郎の全作品集に収められた参考写真でのその心棒や荒づ

けを見ると動勢やプランを消化して来た光太郎が、このような鈍いわら人形の如き心棒や荒づけの方法論をたてることがないことがわかる。…（中略）…光太郎のこの作の行きつく場が最初から示されている。これは光太郎の中では、空白期を補う捨石と考えられていたのだろうか。絶作の倉田氏像では、明らかに発展、新しい展開への意図が形から読める。^{注16}

としている。助手に厳格な要求が出せなかった光太郎にこの塑像に対する責任があることは間違いない。しかし、それらの悪い条件の中にあっても光太郎の才能の非凡さを疑うことが出来ず認めなければならぬと岡村氏はしている。^{注17}

以上の岡村氏の「十和田湖の裸婦像」の評論は氏自身のいう通り具体的な解析がなされていると思われる。また、わたしもその通りであると思う。理由は岡村氏が光太郎の近代彫刻における存在意義や彫刻それ自体をどれだけ理解しているかを示している点で、氏が光太郎の詩からの適当な引用や、光太郎の彫刻の評論などからの引用がなく、氏自身の経験からくるのであろう立場からのみ意見を述べている態度なのである。氏は無責任に光太郎の彫刻を評しているのではないのである。そしてそのような態度からこそ初めて光太郎の彫刻が理解されることになるのではないだろうか。私たちは知らず知らずのうちに、光太郎の彫刻にいろいろなものを付着させてきたように思う。光太郎の表出してきたものを勝手に繋ぎ合せてみたりしていないだろうか。確かに光太郎という一人の人間から生まれてきたものであるから何らかの繋がりを持つものであるだろう。しかし、それはある一つの物事に対

して明確な論理の追及なくしては、どんなものも繋がりになどありはしないのではないだろうか。

「十和田湖の裸婦像」に対する私たちの態度は様々な意味で意義深い。この作品をどのような態度で見ているのかによって私たちは飾にかけられ、後に光太郎を研究するうえで態度が決定されると言っても過言ではないだろう。それによって限り無く光太郎に近付いて行くことが出来るのか、または、違う光太郎を創造していくのかという大別すれば二つの道のどちらか一方が眼前に広がっていくことになる。願わくば後者にはならないようにしたいものである。

注1 『新潮日本文学アルバム 8 高村光太郎』（一九八四年六月二〇日発行）

注2 同注1参照

注3 同注1参照

注4 同注1参照

注5 同注1参照

注6 同注1参照

注7 北川太一編「高村光太郎年譜」（『高村光太郎選集』第六卷 春秋社 昭57・3）

注8 同注7参照

注9 本郷新「高村光太郎の彫刻」（『文芸』13巻10号臨時増刊号 昭31・6）

注10 高田博厚「彫刻と高村光太郎」（草野心平編『高村光太郎研究』所収 筑摩書房 昭34・3）

注11 石井鶴三「礫山と光太郎」（草野心平編『高村光太郎研究』所収 筑摩書房 昭34・3）

注12 原田実「高村光太郎―造形のあゆみ」（近代美術の開拓者たち（1）

注13 |わたしの愛する画家・彫刻家―所収 有斐閣選書 昭55・11）
注10～12に挙げたもの以外に山本稚彦「高村光太郎―人と彫刻」（高村光太郎彫刻全作品）所収 六耀社 昭54・8）、佐藤忠良・舟越保武「対談」思い出す人々」（『対談彫刻家の眼』所収 講談社 昭58・6）、東珠樹「彫刻と詩と」（『近代彫刻 生命の創造―ロダニズムの青春―』所収 美術出版社 昭60・6）などが「十和田湖の裸婦像」について語られてある。

注14 岡村康彦「十和田湖記念像の造型」（『春秋』231 昭56・12）

注15 同注14参照

注16 同注14参照

注17 同注14参照